

文字を書き進める過程を重視した学習指導の実践

平成17年度東京学芸大学附属学校研究会プロジェクト研究Ⅲ

東京学芸大学附属高等学校 荒井一浩

東京学芸大学 加藤泰弘

東京学芸大学附属世田谷小学校 中村和弘

東京学芸大学附属竹早中学校 松本貴子

渋谷区立八幡山小学校 水株真由美

目 次

1 はじめに 一本研究の位置づけ一	42
2 文字を書き進める過程の重視について	42
3 本研究における役割分担	43
4 附属世田谷小学校における実践	43
5 学習指導案の実際	44
6 学習指導を通じて、児童は何を学び、何を感じたか	48
7 文字を書き進める過程を重視した学習のモデルプラン	51
8 おわりに 一公立小学校への展開に向けて一	51

文字を書き進める過程を重視した学習指導の実践

平成17年度東京学芸大学附属学校研究会プロジェクト研究Ⅲ

東京学芸大学附属高等学校 荒井一浩

東京学芸大学 加藤泰弘

東京学芸大学附属世田谷小学校 中村和弘

東京学芸大学附属竹早中学校 松本貴子

渋谷区立八幡山小学校 水株真由美

1 はじめに 一本研究の位置づけ

附属学校研究会書写・書道部会では、平成15年度「書写と書道の接続に関する実践的研究—行書の習得のあり方を中心として—」、平成16年度「書写と書道の一貫性のあり方に関する研究—児童、生徒の毛筆への意識と表現力を中心として—」と題した実践研究を積み重ねてきた。本研究はそれらの研究成果を受けて行われたものである。

「書写と書道の接続に関する実践的研究」では、中学校国語科書写と高等学校芸術科書道との関連に絞り、特に行書の習得を書字速度や要素別習熟度を調査することにより比較、検討した。また、「書写と書道の一貫性のあり方に関する研究」では、対象を小学校から高等学校段階までに拡大し、ほぼ同一条件の設問による毛筆に関する意識調査を実施、同時に校種による表現力の差異も調査、検討することによって、書写と書道を取り巻く学習環境の中で改善すべき課題はどこにあるのかを明らかにしようと試みた。

これらの収集されたデータを分析していく過程で、いくつかの課題が見えてきたが、われわれがもっとも関心を寄せたのは書き上げた文字の巧拙をことさら気にする児童、生徒の姿である。字形や組み立て、全体としてのまとまりなどを意識する者もいるが、中には、たとえば「はらい」など、ただ一カ所の筆使いにこだわりを持ち続けることで、学習の目標を見失い、苦手意識だけが残るといったような事例にも出会った。特に、文字を獲得する初期の段階、つまり小学校の段階では「毛筆は硬筆の基礎である」との意識を強く持ち、「日常に生きて働く書写力」を育成することを学習の最大の目標に掲げていた指導者たちにとっては、目の当たりにした児童、生徒の作品成果主義とも言えるこだわりには驚きを禁じ得なかった。毛筆を、書字能力を高めるために有効な学習用具ととらえていたわれわれに対し、児童、生徒は作品をまとめ、完成するための用具としてとらえていたわけである。

そこで、われわれは書き上げたいわゆる「作品」をもとに指導し、学習を進め、書写力の育成を図っていくという視点から、実際に書き進める過程を指導の対象の中心に据えることで、授業改善を目指すこととしたのである。

2 文字を書き進める過程の重視について

前述の通り、従来の書写の学習指導は、「手本」を見てそれに近づけ「作品」として「完成」させるというプロセスの中で行われてきたとあってよいだろう。「手本」に近づけるための援助として、書き上げられた「作品」に加朱添削が施され、児童、生徒はそれを見て、次のステップに進んでいく。加朱添削されたものを意識しながら繰り返して書くことによって、技術が向上して「作品」としての完成度が高くなっていくという構図である。

経験を積んだ指導者においては、書き上げられたものを見れば、どのように書き進めたかというその過程が把握できるという考え方もあろう。それを踏まえて、加朱添削等を指導として行っているのだ、という声も聞こえてくるかもしれない。

しかし、この構図にはいくつかの問題点が存在する。まず、書き進める過程のあり方を把握しなければならないのは、指導者のみならず、学習者が重要であるということだ。教えられ、指摘されれば分かることは分かるであろうが、もっとも肝要なのは自らが気づき、自らがその解決方法を模索することであろう。そうでなければ、応用し、転移を図り、日常生活に生きる書写力を育むことはできない。そのためにも、学習者自身が書き進める過程に意識的に注意を払う必要がある。

次に、加朱添削やそれに類することを前提とした場合、現実に指導できるのは、ある程度技法的に習熟した指導者に限られるということである。現状では、小学校教員は原則的に全科を担当しており、たとえ指導者自身が習熟した技法を身につけていなくとも、学習の目標や書写についての基本的な考え方が分かっているならば、的確な学習指導が実践できるということを考えなければならない。文字を手書きすることが、基礎・基本の一つであると容認するのなら、すべての教員が取り組める方法を提示することが急務であると考えている。

3 本研究における役割分担

本研究は附属学校と大学、そして公立学校との共同研究として行った。その方向性と理論構築は荒井と加藤が、附属世田谷小学校における研究授業を中村、荒井と加藤が、それらの分析・考察およびモデルプランの作成を松本、水株を含めた全員で、そして全体調整を荒井が行った。

4 附属世田谷小学校における実践

4.1 実践の概要

実践は共同研究者の一人である中村の勤務、担任をする附属世田谷小学校6年3組を借りて行った。概要は以下の通りである。

- (1) 実施時期 平成17年6月～7月
 - (2) 単元名 筆使いと字形（点画のつながりと字形のまとめり）
 - (3) 授業回数 全3回
 - ① 「い」「に」を書く。（毛筆）
 - ② 「い」「け」「くに」を書く。（毛筆）
 - ③ 「池」「土地」を書く。（毛筆）
- 「この土地には美しい池がある」を書く。（硬筆）

4.2 6年3組の概況

担任の中村から見たクラスの状況である。

「子どもにとって空気のような存在である言葉に、まず気づいてほしい」「毎日使っているながら、その言葉がもつ不思議さや面白みに気づいてほしい」、それが担任としての願いである。子どもに言葉を意識させるような国語の授業を何度か行ってきた。そのせいか、学級としては総じて、「あっ、その言い方おもしろい！」と感ぜられる子どもや「へえ、そうなんだ」と素直に関心を寄せられる子どもが多い。

書写の授業もこの流れに位置づけている。いわゆる「お手本」にいかに近づける書き方ができるかという指導はしていない。自分の書いた字のどこをどのように書き直していくことがいいのか、子ども同士の学び合いを組織し、お互いの気付き合いの中から学習内容に迫れるような授業に取り組んできた。そうした授業を通して、「なるほど、だから文字の組み立てを理解することが大事なんだな」と納得しながら書き進められるようになった児童が増えつつある。また、書写の授業で学んだ書き方を、日常のノート作りなどにも生かそうとしてきている。

本単元で扱う「筆脈」の指導は、こうした本学級の児童にとっては新鮮な出会いであるとともに、「なるほど」と深く納得できる内容であると考えている。

5 学習指導案の実際

5.1 第1時<実践1> (担当 中村)

書写の用具・用材、姿勢・執筆等を確認した後、「い」「に」を毛筆を用いて書写した。学習材(手本)は特に用意せず、ていねいに書くことだけを促した。ここで集められた資料は、<実践2>の学習成果と比較・検討の材料とした。(紙面の都合上、学習指導案は割愛する)

5.2 第2時<実践2> (担当 荒井)

実際の学習指導案を掲出する。

国語科学習指導案

授業者 荒井一浩

日時 平成17年6月29日(水) 第1時限

学年 第6学年3組(児童数38名)

単元名 筆使いと字形(点画のつながりと字形のまとまり)

1. 単元の学習目標

- ①書くことに関心を持ち、課題意識をもって取り組むことができる。
- ②毛筆で点画のつながりを意識して書き、字形のまとまりに気をつけて書くことができる。
- ③毛筆で学習したことを硬筆に生かして書くことができる。

2. 単元設定の理由

高学年になると、活動の場が広がり、文章を書く場面も格段に増える。児童のノートの文字にも字形や形、配列に気をつけて書かれていないという傾向がみられる。高学年では「毛筆を使用して点画の筆使いや文字の組み立て方を理解しながら、文字の字形を整えて書くこと」が学習目標となっている。毛筆で書き進める過程、つまりは点画のつながりを意識して書くことによって、字形にまとまりが出て、日常に生きて働く書写力を育成することができる考える。

本単元では、まず、低・中学年で学んできた「ひらがな」を、つながりを意識して書くことで、自分の平仮名の字形のまとまりを振り返る。また、その書き進める過程の意識化を「漢字」にも応用し、「漢字」と「ひらがな」を調和させて書くことによって、基礎・基本をさらに徹底していく。また、毛筆で学習したことを硬筆に生かし、日常に生かせる書写力へとつなげる。

3. 学習指導計画(各一時間、計三時間扱い)

①平仮名を書き進める過程を意識して書く。(本時)

- ・平仮名「い」の点画の空間でのつながりと字形のまとまりについて考える。
- ・「い」を毛筆で書き点画の空間でのつながりを理解する。
- ・その他の平仮名(「け」「こ」)にも応用し、漢字「池」についても考えてみる。

②漢字を書き進める過程を意識して書き、硬筆へ生かす。(本時)

- ・平仮名で学習した筆脈(空間でのつながり)を漢字「池」に応用し、字形のまとまりについて考える。
- ・「池」を筆脈を意識して書く。
- ・その他の漢字「地」にも応用し、「土地」を点画のつながりを意識して書く。
- ・毛筆で学習した点画のつながりを硬筆にも生かして書く。(「この土地には美しい池がある」)

4. 本時の学習指導

①目標

- ・平仮名「い」の第一筆と第二筆の空間でのつながりと字形のまとまりの関係について理解できる。
- ・書く過程を意識して書くことを、他の平仮名にも応用できる。

②学習指導の展開

	学 習 活 動	教師の支援(○支援 ●留意点)	評価の観点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習の確認 ・本時の目標の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習に向かう姿勢が整っていることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習を想起できたか
展 開	気づく <ul style="list-style-type: none"> ・「い」の第一筆と第二筆の位置関係などを確認する ・その位置関係が何によってもたらされるのか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ●黒板に分解文字を使って、第一筆と第二筆の位置(高さや傾き)を考えるように促す。 ○空間でのつながりについて気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・空間でのつながりと字形のまとまりについて気づくことができたか。
	分かる <ul style="list-style-type: none"> ・「い」を机の上で指書きし、書く過程(空間でのつながり)を意識させる。 ・姿勢・執筆を確認する。 ・指書きのリズムを生かして「い」を毛筆で書いてみる。 ・友人の書く姿を観察し、それを自らの活動に生かす。 ・再度、書き進める過程を意識して書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなで声を出しながら、指下書きするように促す。 ●姿勢・執筆を確認するように促す。 ○半紙を二等分し、まず二回に書くように促す。 ●次に下の位置に書くように促す。ここでは隣の友人と一組になり、お互いが観察し合うようにする。そしてお互いの空間でのつながりについて指摘し合うように促す。 ○相互の指摘を踏まえて、もう二回書くように伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・声を出し、全身を使って書くことができたか。 ・積極的に姿勢・執筆を確認できたか。 ・第一筆と第二筆のつながりを意識して書けたか。 ・友人の活動をしっかりと観察することができたか。 ・字形のまとまりがとれたか。
	広げる <ul style="list-style-type: none"> ・平仮名で他に空間でのつながり意識して書いたらよい文字を考える。 ・分解文字「に」を組み立ててみる。 ・各自が組み立てた「に」を検討する。 ・「に」をつながり意識して書く。 ・「くに」をまとまりよく書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「は」「に」「け」など横につながる平仮名や「こ」「た」などの縦につながる文字など自由に見つけるよう促す。 ●分解文字の「に」を各自に示し、つながり意識して組み立ててみるように促す。 ○「くに」の学習材を配布する。 ●各自が組み立てた「に」と学習材の「に」を比較し、相違を見つけるように促す。 ○「くに」をつながり意識して書くように促す。 ●机間支援をして問題点が解決できるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平仮名を見つけることができたか。 ・分解文字をつながり意識して組み立てられたか。 ・組み立てた文字と学習材の文字を比較し相違点・課題点を見いだせたか。 ・書き進める過程を意識して書けたか。
終 局	振り返る <ul style="list-style-type: none"> ・評価カードに記入し、学習成果を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●前回の試書と比較して、評価カードにまとめるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの変容を意識できたか。
	まとめる <ul style="list-style-type: none"> ・次時の学習活動を確認する。 ・次時の学習活動が本時の成果を踏まえて展開されることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●書き上げた文字は、書き進める過程を意識することにより変わっていくことを理解するように促す。 ○片づけを的確に進めるよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次時への積極的な取り組みを意識できたか。

③評価

- ・平仮名「い」の第一筆と第二筆の空間でのつながりを意識して書けたか。
- ・書く過程を意識して書くことを、他の平仮名にも応用できたか。

5.3 第3時<実践3> (担当 加藤)

実際の学習指導案を掲出する。

国語科学習指導案

授業者 加藤泰弘

日時 平成17年7月6日(水) 第1時限

学年 第6学年3組(児童数38名)

単元名 筆使いと字形(点画のつながりと字形のまとまり)

1. 単元の学習目標

- ① 書くことに関心を持ち、課題意識をもって取り組むことができる。
- ② 毛筆で点画のつながりを意識して書き、字形のまとまりに気をつけて書くことができる。
- ③ 毛筆で学習したことを硬筆に生かして書くことができる。

2. 単元設定の理由

高学年になると、活動の場が広がり、文章を書く場面も格段に増える。児童のノートの文字にも字形や形、配列に気をつけて書かれていないという傾向がみられる。高学年では「毛筆を使用して点画の筆使いや文字の組み立て方を理解しながら、文字の字形を整えて書くこと」が学習目標となっている。毛筆で書き進める過程、つまりは点画のつながりを意識して書くことによって、字形にまとまりが出て、日常に生きて働く書写力を育成することができると思う。

本単元では、まず、低・中学年で学んできた「ひらがな」を、つながりを意識して書くことで、自分の平仮名の字形のまとまりを振り返る。また、その書き進める過程の意識化を「漢字」にも応用し、「漢字」と「ひらがな」を調和させて書くことによって、基礎・基本をさらに徹底していく。また、毛筆で学習したことを硬筆に生かし、日常に生かせる書写力へとつなげる。

3. 学習指導計画(各一時間、計三時間扱い)

- ①平仮名を書き進める過程を意識して書く。
 - ・平仮名「い」の点画の空間でのつながりと字形のまとまりについて考える。
 - ・「い」を毛筆で書き第一筆と第二筆の空間でのつながりを理解する。
 - ・その他の平仮名(「に」)にも応用し、漢字「池」についても考えてみる。
- ②漢字を書き進める過程を意識して書き、硬筆へ生かす。(本時)
 - ・平仮名で学習した筆脈(空間でのつながり)を漢字「池」に応用し、字形のまとまりについて考える。
 - ・「池」を筆脈を意識して書く。
 - ・その他の漢字「地」にも応用し、「土地」を点画のつながりを意識して書く。
 - ・毛筆で学習した点画のつながりを硬筆にも生かして書く。(「この土地には美しい池がある」)

4. 本時の学習指導

①目標

- ・漢字「池」の点画のつながりと字形のまとまりの関係について理解できる。
- ・書く過程を意識して書くことを、他の漢字「地」にも応用できる。
- ・毛筆で学習した点画のつながりを硬筆にも生かして書ける。

②学習指導の展開

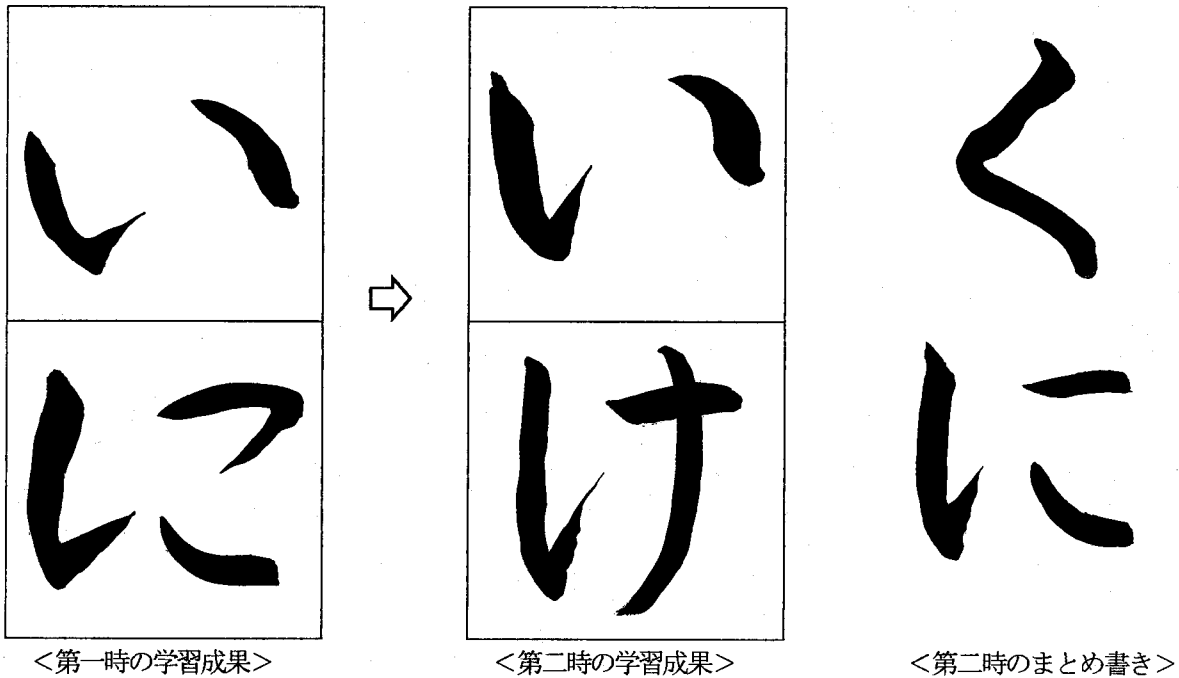
	学 習 活 動	教師の支援(○支援 ●留意点)	評価の観点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習の確認 ・本時の目標の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習に向かう姿勢を確認する。 ○前時で、つながりを意識して「い」「け」を書き、それが字形のまとまりと関係があったことを想起するように促す。 ○前回の学習を漢字に応用することを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習を想起できたか。 ・本時の目標をつかもうとしたか。
展 開	気づく <ul style="list-style-type: none"> ・平仮名での学習が漢字にも応用できることを、漢字「池」を通して具体的に気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「池」の分解文字(扁とつくり)を各自に配布し、つながりを意識して組み立ててみるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分解文字をつながりを意識して組み立てられたか。
	分かる <ul style="list-style-type: none"> ・各自が組み立てた「池」を検討する。 ・点画のつながりを意識して「池」を毛筆で書いてみる。 ・友人の書く姿を観察し、それを自らの活動に生かす。 ・再度、点画のつながりを意識して書く。一枚まとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「池」の学習材を配布する。 ●各自が組み立てた「池」と学習材の「池」を比較し、相違を見つけるように促す。 ●半紙を二等分し、まず上の位置に書いてみるように促す。 ●次に下の位置に書くように促す。ここでは隣の友人と一組になり、お互いに観察し、点画のつながりについて指摘しあうように促す。 ○相互の指摘を踏まえ、もう二枚書き、一枚はまとめ書きとすることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・組み立てた文字と学習材の文字を比較し相違点、課題を見いだせたか。 ・点画のつながりを意識して書けたか。 ・友人の活動をしっかりと観察することができたか。 ・字形のまとまりがとれたか。
	広げる <ul style="list-style-type: none"> ・点画のつながりを「池」→「地」(さんずい→土へん)に応用する。 ・「地」の偏の形が、点画のつながりと関係のあることに気づく。 ・「土地」をつながりを意識して書く。 ・まとめ書きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●黒板に分解文字を使って、「土へん」と「也」の位置を考えるように促す ○学習材「土地」を配布する。 ●「地」を示し、「土」と「土扁」の形の違いは、点画のつながりが一つの理由となっていることを理解するよう促す。 ○「土地」をつながりを意識して書くように促す。また、机間支援をして問題点が解決できるように促す。 ○一枚まとめ書きとすることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「池」(さんずい)から「地」(土へん)に応用できたか ・点画のつながりを意識して書けたか。
終 局	振り返る <ul style="list-style-type: none"> ・書写カードに記入し、学習結果を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ●前回の「池」と比較して、書写カードにまとめるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの変容を意識できたか。
	まとめる <ul style="list-style-type: none"> ・書写カードに、毛筆で学習した点画のつながりを硬筆に生かして書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○毛筆で学習してきた「書き進める過程を意識する」ことを硬筆へ生かすように促す。 ●片付けを的確に進めるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毛筆で学習したことを硬筆に生かすことができたか。

③評価

- ・点画のつながりを意識して「池」を書き、字形のまとまりに気をつけて書けたか。
- ・書く過程を意識して書くことを、他の漢字「地」にも応用できたか。
- ・毛筆で学習した点画のつながりを硬筆にも生かして書けたか。

6 学習指導を通じて、児童は何を学び、何を感じたか

6.1 <実践2>学習成果と自己評価カードから



同一児童の学習成果を第一時と第二時とで比較してみた。いずれも第一筆から第二筆への点画の連続性の意識が変わっている様子が見て取れるであろう。点画のつながりが実現することで、字形そのものにまとまりが出て、自然な無理のない運筆を感じることができる。

<実践2>の終局において自己評価カードを記入させた。三択による三設問と一言感想である。

	◎	○	△
<設問1>前の時間に書いたときと意識は変わりましたか	2 2	1 3	2
<設問2>リズムよく書き進めることができましたか	1 3	2 2	3
<設問3>字形がまとまってきたと思いますか	8	1 9	1 1

この結果をみると、<実践1>から<実践2>への展開の中で意識が大きく変わった者が約6割、ある程度変わった者を含めるとほぼ全員が意識の変化を感じ取っているようだ。しかし、「リズムよく」「字形のまとまり」と進むにつれ、その感じ方は弱くなっている。点画のつながりを意識して書くことがあまり字形のまとまりに通じていないと感じている生徒が約3割いることは、今後の課題となる。

次に一言感想の記述を載せる。下線を引いてある感想は学習の目標に関わった感想ととらえられるものである。思っていたよりも、きれいに書けてよかった。／いろいろと毛筆のコツをつかめた。

意識を変えて字を書くと、意識によって上手になったり、下手になったりした。

うまくは書けなかったけれど、つなげる字のやり方が良く分かった。楽しかったです。

バランスがとれにくい。／前より、上達したと思いました。ありがとうございました。

「はね」が次の画への「つながり」というのは初耳で、知識が増えました。これからは、気を付けて書きたいと

思います。／字について、とても良く分かりました。ありがとうございます。

前回より「はね」の角度などに意識できた。／むずたのしい。／今さらながらですが、ぼくは字が下手です。

字はむずかしい……、と今さら気づいた。／今日の授業はとても楽しかったので、また、授業を受けたいです。

書いていくうちにどんどん上手になっていったと思うのでよかったです。／漢字が書きたかった。

今まであまり、つながりを気にして書いたことがなかったので、今日、それが身につけてよかったです。

高校の先生らしい授業だった。／はねがうまくいきませんでした。

今日はよい経験になりました。今日習った「い」のはねのことを意識して書いていきます。

「に」が下手でした。／「い」をていねいに書くなてなかつたので、楽しかった。

前の時間よりも「はね」や「とめ」ができてきたので、よかったです。

どうも、うかせたときに、つながりが無くなってしまおうので、なおしたい。

字の形、バランスが改めて分かってよかったです。／漢字を書いてみたいです。／あまり、うまく書けませんでした。

つながりを意識すると、字のバランスがよくなった。

「い」は確かに簡単でしたが、「くに」は何度やってもうまくいきませんでした。

ハネからつながるのが難しかったです。ありがとうございました。

今日は、つながりということ意識して書写をやって、とてもうまく書けました！

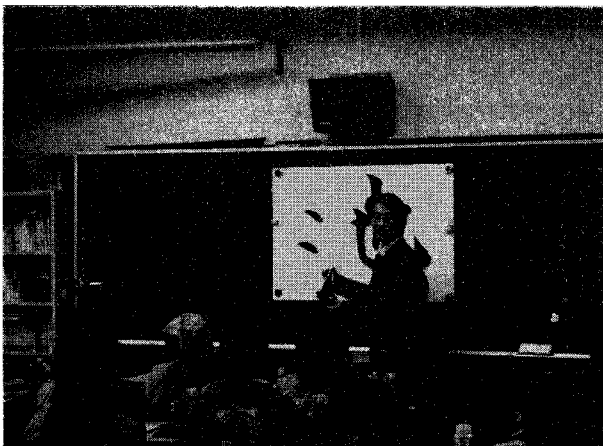
このごろは書写の時間が多くなったので、前よりずっと字がうまくなった。／あまりうまく書けません。

習字は難しいけれど、すごく楽しい！／やっぱり字をまとめるのは難しかった。

毛筆は難しい！けど楽しい。／少しくまくなった気がします。

はねでつながっているけど、間を書くのが難しいです。／つながりがよくなりました。

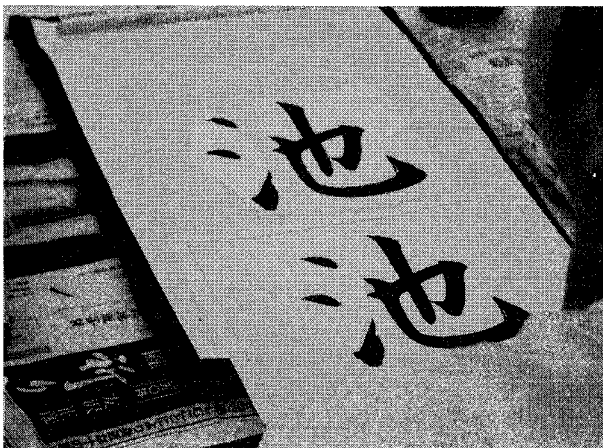
6.2 <実践3>での学習活動と書写カードから



黒板に文字のパーツを貼り、みんなで文字の組み立てを考える。

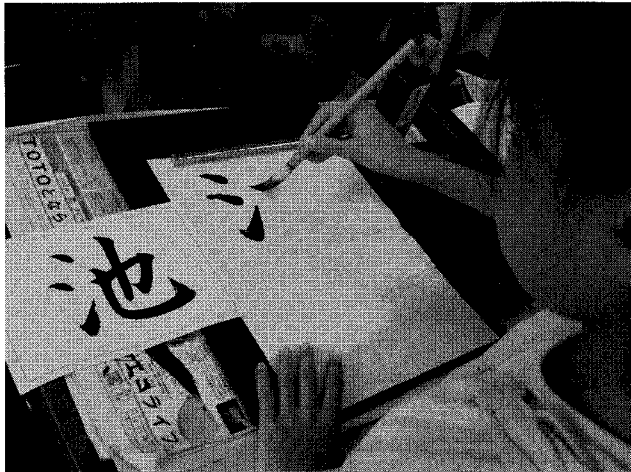
偏と傍の位置関係は？

筆はどこを通るのだろう？

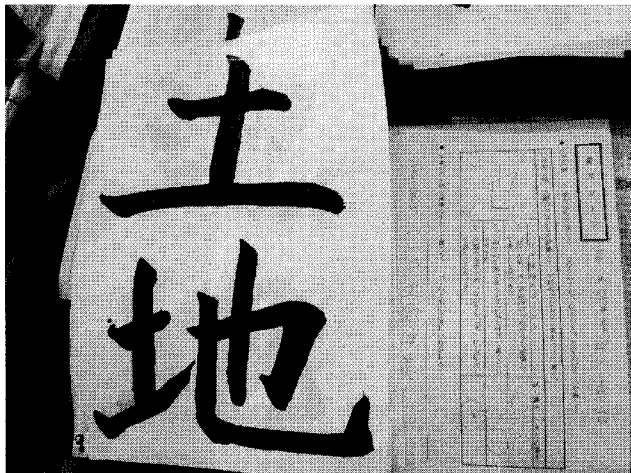


偏と傍のバランスを考えて分解文字を配置してみる。

自分で組み立てたものを学習材と比較してみる。



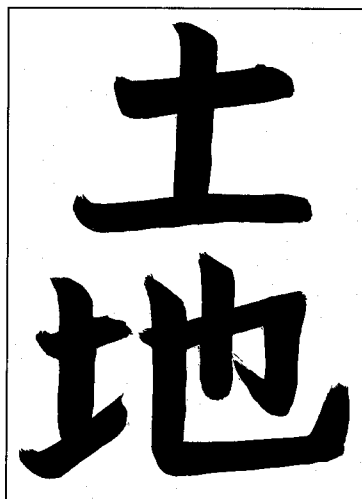
さんずいの三角目の方向は？
点画のつながりを意識しながら、隣の
筆の位置を決める。
しっかりと学習材と見比べる。



まとめ書きをした学習成果と書写カー
ド。
しっかりとポイントを押さえた学習が
できただろうか。
書写カードで硬筆にも応用する。
自己評価が大切だ。



<池>



<土地>

書写カード 六年 三編 一九番 氏名

自己評価 学習を振り返り、気づいたこと、よかったこと、気になったことを書く。

○学習目標 点画のつながりを意識して、字形のまわりを整えて書く。

池	地	池	地
○	○	○	○
○	○	○	○

毛筆での学習を硬筆に生かして書く。この土地には美しい池がある。

この土地には美しい池がある。

池がある

池かある

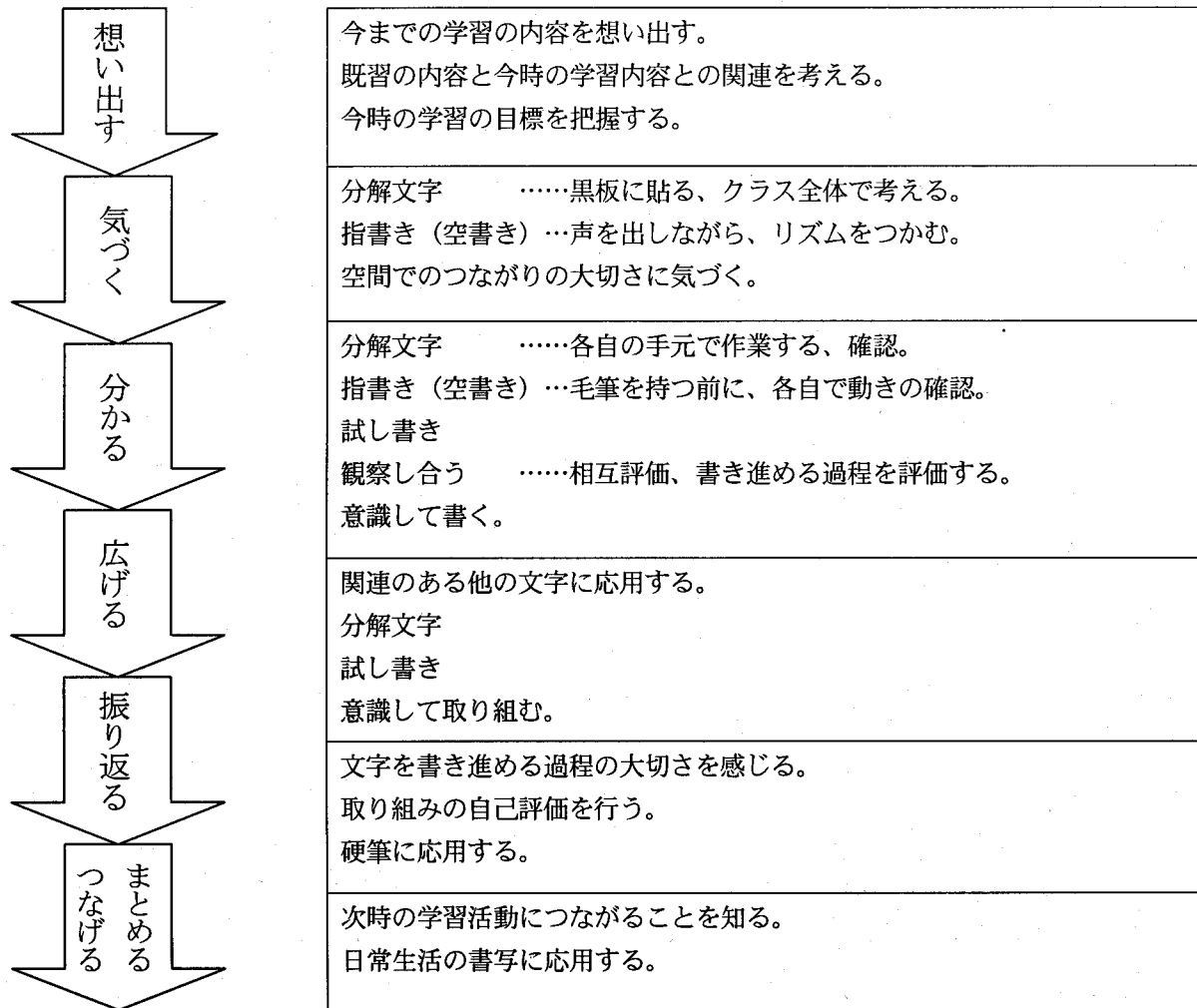
この土地には美しい

<書写カード>

「池」の第三画を右上に高く抜くように、「土地」の「地」の第三画も隣の第一画を意識して抜かれている。書写カードでは「池」「地」のほか、前時に行ったひらがなの「こ」「に」「い」などつながりを意識して書く文字を含んだ硬筆の課題も用意されている。

7 文字を書き進める過程を重視した学習のモデルプラン

「2文字を書き進める過程の重視について」でも触れたように、指導者の側に高度な技量が備わっていないと、学習指導過程の骨格を的確に把握することによって誰でもが一定の成果の上がる授業プランを提示していくことが大切だと考える。今回の研究を通して作成した学習指導案の中から流れを抽出して以下に示す。



8 おわりに 一公立小学校への展開に向けて一

今回の取り組みは、一定の成果をあげたのではないかと考えている。児童が残した学習成果を検討すれば、その変容は多くの面で指摘できるし、書かれた感想からも、楽しんで取り組み、結果として向上した自分を感じ取っているようだ。

しかし、今後展開すべき課題は二つある。一つは、こういった取り組みをしっかりと年間学習指導計画の中に組み込み、継続的に学習指導を重ねていくことである。もう一つは、附属学校だけでなく、多くの学校、児童、生徒に取り組んでいただき、検証を重ね、よりよい学習プランを練っていくことである。そのためにも、次年度以降、公立学校の協力を仰ぎながら活動を広めていきたい。